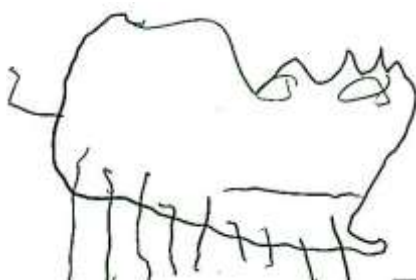


子ども支援に活かすクリエイティブ・アーツ
～表現あそびがたがやす子どもの心～
報告書



2013年1月14日(月)10:00～16:30
がんばれ！子供村

主催 APCONCEPT
共催 N-CAT

*この活動は、子どもゆめ基金（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の助成金の交付を受けて実施しました。

目次

1. はじめに
2. 概要
3. 講師プロフィール
4. 活動報告
 - －基調講演
 - －体験授業
 - －分科会
 - 学習を促進するアート表現／からだの触れ合いがこころを育む／
 - 多様な単位で支える子どもの育成
 - －全体会 ワールドカフェ
5. アンケート
6. チラシ

1. はじめに

子どもたちは、体を動かし、手で触れるといった実体験をとおして、考え、想像し、学んでいく力をもっています。また、正答や評価にしばられないで自由に表現し、その表現をうけとめられる経験を積み重ねながら、心を育て、成長していきます。

ドラマセラピスト、David. R. Johnson氏は講演の中で、「かつて、子どもたちはツリーハウスや段ボールハウスといったミニチュア世界の“中”で、“実際”に遊んだ。今は、テレビ画面やiPadといった箱を“外”から“眺めて”遊ぶ」と言いました。小さな箱の中にまだ見ぬ世界が映し出され、ボタン一つで情報を検索することができるこの時代、子どもたちを取り囲む遊びの環境、学びの環境は、大きく変わってきています。

今回のシンポジウムでは、このような時代の流れの中で、自由な表現の場とかかわるクリエイティブ・アーツの可能性をさぐり、大人である我々が、日々子どもたちとの関わりにおいて大切にすべき事柄を学びあうことを目的に開催されました。

当日は朝からの激しい雨にもかかわらず、60余名の参加者が集い、のちに変わった雪に負けない、熱気に満ちた時間をすごしました。

基調講演では、赤鼻センセイとしても知られ、病気やけがで入院する子どもたちに日々寄り添う副島氏から、院内学級の子どもたちとのエピソードをお話いただきました。どのエピソードにも子どもたちとの心の交流が感じられ、子どもが語れる安心を作り出す関わりについて、いくつもの視点をいただいたように思います。つづく体験授業では、アプライドドラマという演劇教育の一つのアプローチを、オーハシ氏のリードによって体験しました。童心に帰りドラマの世界を楽しみながらも、深いテーマを考える土壌が作られていくのを感じ、このアプローチの意義を強く感じた時間となりました。

午後には、3つの分科会が開催されました。各分科会では、それぞれに、教育の中で、地域の中で、己を知るツールとしてのクリエイティブ・アーツを用いた取り組みの紹介がなされました。多様な角度から、クリエイティブ・アーツの可能性を考える時間になったように思います。

最後のプログラムとなった全体会では、ワールドカフェという手法を用いて、「ありのままがいい」というキーワードについて、小グループで話す時間を持ちました。一日を共有してきた参加者同士が言葉を交わす様子を見ながら、「決めない会議」ともいわれる対話のためのこの空間もまた、朝から流れるテーマに通じるものなのではないかという思いがわいてきました。

終了後も多くの参加者が残り、交流を続けていました。終わることのない対話を今後も続けながら、ここで生まれた支援者同士のつながりがより強くなり、また新たな広がりをもって育っていくことを願っています。

2. 概要

日時 2013年1月14日(月・祝) 午前10時～午後4時30分
 会場 がんばれ!子供村ビル全館
 (東京都豊島区雑司が谷3-12-9)
 参加者 68名
 参加費 無料
 主催 アップコンセプト
 共催 N-CAT (Network of Creative Arts Therapists)

<プログラム>

午前の部

10:00～	基調講演	4階研修室
11:30	「こころの声言葉になる～院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと～」 副島 賢和	
11:40～	体験授業 「さあ、みんなでアプライドドラマ!お話の世界に	
12:40	飛び込もう!」 オーハシヨースケ	

午後の部

13:30～	分科会① 「学習を促進するアート表現」	小野 京子	4階研修室
	分科会② 「からだの触れ合いがこころを育む」	神宮 京子	3階 プレイルーム
	分科会③ 「多様な単位で支える子どもの育成 ～ハワイの音楽療法に学ぶ子ども支援のありかた」	大竹 孔三	2階 コミュニティ ースペース
15:15～	全体会 「コミュニティーカフェで今日一日を振り返ろう」	倉石 聡子 井口 雅子	4階研修室
16:30			

3. 講師プロフィール

◆基調講演

副島賢和 (そえじままさかず)

1966年、福岡県生まれ。89年、都留文科大学卒業。同年、東京都公立小学校教員として採用され、以後17年間、都立公立小学校普通学級担任として勤務。99年、東京都の派遣研修で、在職のまま東京学芸大学大学院にて心理学を学ぶ。2006年より品川区立清水台小学校さいかち学級(昭和大学病院内)担任。現職。学校心理士。小林正幸氏(東京学芸大学大学院教授)らと共に、「チーム仕事師」のメンバーとして「みどりの東北元気キャンプ」をおこなう。共著に『学校でしかできない不登校支援と未然防止』(東洋館出版社/09年)等。ドラマ『赤鼻のセンセイ』(日本テレビ/09年)のモチーフとなる。11年には、『プロフェッショナル仕事の流儀』(NHK総合)にも出演。ホスピタル・クラウンの活動もしており、「パッチ・アダムス」として有名なハンター・キャンベル・アダムス氏(米国)の活動に参加している。

◆体験授業

オーハシヨースケ

身体詩パフォーマー／演劇教育プラクティショナー／

NPO 法人祈りの芸術 TAICHI-KIKAKU 副理事長

早稲田大学文学部演劇専攻卒業。1985年 TAICHI-KIKAKU をモリムラルミコと結成、88年のパリ公演を期に、これまで世界23ヶ国50都市以上で公演。92年 JT クロス・カルチャー大賞、95年第7回カイロ 国際実験演劇祭「BEST ACTOR AWARD」受賞。2001年国際交流基金フェロシップを得て IAD 芸術大学(ベルギー)、2006年文化庁新進芸術家海外派遣でイギリス・チェスター大学で身体詩ワークショップを指導。他にも世界各地の国際演劇祭などで身体詩ワークショップを指導。日本工学院専門学校声優俳優科講師。桐朋学園芸術短期大学演劇科講師。

◆分科会

小野京子 (おのきょうこ)

臨床心理士、国際表現アートセラピー学会認定表現アートセラピスト、表現アートセラピー研究所代表、NPO アートワークジャパン理事長、神奈川大学大学院非常勤講師、大手銀行にてメンタルヘルス業務に関わっている。

日本女子大卒。

日本女子大大学院(児童心理)修士号取得。

米カリフォルニア州立ソノマ大学大学院(心理学)修士号取得。

米国パーソンセンタード・エクスプレッシブ・セラピー研究所訓練プログラム卒業。

Europe Graduate School の Advanced Study 修了。

神宮京子（じんぐうきょうこ）

アメリカ・ダンスセラピー協会認定ダンスセラピスト、日本ダンスセラピー協会認定ダンスセラピスト、日本ダンスセラピー協会理事。

ニューヨーク市立大学ハンター・カレッジ大学院にてダンス／ムーブメントセラピーを学び、1996年卒業・資格取得。1997年に帰国し、以後群馬県を拠点に臨床活動を行い、都内その他でトレーニング・セミナーやワークショップを開催。特別・特定医療法人群馬会群馬病院、群馬県立精神医療センター、神川町保健センターでダンスセラピストとして勤務。

大竹孔三（おおたけよしみ）

米国音楽療法協会認定音楽療法士・ノードフロビズ音楽療法士。広島県福山市出身。中京大学文学部心理学科を2002年に卒業後、渡米。ニューヨーク大学大学院音楽療法学科にて2004年に修士号取得。卒業後、ノードフ・ロビズ音楽療法センターにてディプロマコース修了。2006年から2007年まで広島県福山市デイサービスセンター「ムジカアートスクエア」にて高齢者を対象に音楽療法士として勤務。2008年から2012年までハワイ、オアフ島の非営利福祉団体 **Sounding Joy Music Therapy** にて、オアフ島をはじめ、ハワイ島、モロカイ島、カウアイ島での音楽療法の現場開拓と臨床に携わる。2012年より同団体の日本支部、**Sounding Joy JAPAN** を設立し、日本とハワイでの国際教育交流と日本での音楽療法普及のため、現在新潟県新発田市を拠点に活動する。

◆全体会

倉石聡子（くらいしあきこ）

アートセラピスト、臨床心理士。Notre Dame De Namur 大学院マレッジ・アンド・ファミリーセラピー/アートセラピー修士。サンマテオ市立の小中学校、ファミリーセンター等で研修を積み帰国。都内教育相談センター心理相談員、不妊クリニック心理カウンセラーなどを経て、現在は東京都スクールカウンセラーとして児童/思春期/保護者/教員の支援に携る他、地域のサポートグループ、カウンセリングルーム、企業セミナー等で子どもと大人のメンタルヘルスに関わる。APCONCEPT(アップコンセプト)にて子ども・大人向けのアートセラピープログラムを行う。

井口雅子（いぐちまさこ）

北米ドラマセラピー協会認定ドラマセラピスト、チャイルド・ライフ・スペシャリスト。日本ドラマセラピー研究所副代表。Kansas State University 大学院演劇科ドラマセラピー専攻修士。地域の知的障がい者とのプログラム、高齢者福祉施設、小児病院などで研修を積み帰国。順天堂大学附属順天堂医院にて病児及びその家族支援を目的とするチャイルド・ライフ・プログラムを担当後、都内教育相談室心理相談員として児童/思春期/保護者/教員の支援に携る他、短大・専門学校などにて青年期/成人の教育・研修に関わる。APCONCEPT（アップコンセプト）にてドラマセラピープログラムを行う。

7. 活動報告

◆基調講演

「こころの声言葉になる～院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと～」

副島 賢和



最初のプログラムは、院内学級の教師であり、赤鼻先生としても知られる副島賢和先生がご登壇されました。かつて、重い病気を患っていたある子どもに頼みごとをした際に言われた一言「お役に立てるなら喜んで」の言葉に励まされ、「お役に立てるなら」の精神で、忙しい合間を縫って全国を飛び回り、講演活動をされているそうです。

不安の大きい入院生活、まずは子どもたちの気持ちを解してあげることが大切と、副島先生はピエロの赤鼻をつけ、得意のバルーンアートや手品を披露するそうです。この日も赤鼻姿でパフォーマンスをしてくださいました。参加者に笑みがこぼれ会場の雰囲気が一気に和やかになったことから、子どもに限らず、大人にとっても気持ちを解すことがいかに大切であるかを実感することができました。

その後、パワーポイントを使って実際の子ども達との活動を紹介してくださいました。手術や治療への不安、在籍校へ戻ることの葛藤、家族や友達への複雑な思いなど、入院生活で感じる様々な感情を、子ども達は詩を用いて表現していました。どんな負の感情もあっていい、その感情の扱い方を一緒に考えるのが大人たちの務めであるというお話が、大変印象に残りました。率直で飾らない子ども達の詩に心を揺さぶられると共に、これほどの感情表現を引き出すには、安心できる場を整え、気持ちを受け止めてくれる先生方の存在があつてこそだと改めて感じました。「上からひっぱるのではなく、子どもを下から持ち上げる」「Doingより Being(何かを行える、何かできることより、そこに存在しているだけで価値がある)」という言葉からも、子どもの支え手として寄り添う大人がどうあるべきか、副島先生の決意と信念を感じ取ることができました。また、受容と許容の違い、我慢と忍耐の違いなど、子ども達や子どもと関わる大人達が直面する様々なテーマを、感情のレベルだけでなく、論理的に紐解いてくださり、参加者は思考的にそして情緒的に学びを深めることができたように思います。

ご講演の最後に、幼くして亡くなった一人の男の子の出会いと別れ、彼の書き残した詩を紹介してくださいました。この少年を含め病院での子ども達との出会いと、彼らの残した記憶の数々が副島先生の支えとなっているのだらうと思います。大人と子ども、支援する側とされる側、教える側と教えられる側、そのように区別することに果たしてどれほどの意味があるのでしょうか。支える・支え合うとはどういうことなのか、このシンポジウムの核となるであろう問いを参加者に投げかける大変貴重な時間になったと思います。



(倉石聡子)

◆体験授業

「さあ、みんなでアプライドドラマ！お話の世界に飛び込もう！」

オーハシヨースケ

いったいなにが始まるのかな。どことなく不安が漂う会議室の空気は、オーハシ氏の指示で身体を揺らしたり、大きな声で笑ったり、動き回って他の人と肩をたたきあって挨拶をしているうちに、どんどん温まっていきました。

参加者全員が物語の登場人物になり、「選択と行動」を繰り返しながら各場面を生きていくというアプライドドラマ。今回体験したアプライドドラマ版

『桃太郎』の中にも、その仕掛けがたくさん散りばめられていました。おばあさんが生まれた桃太郎を村の人たちに見せにいく場面では、「あなたたちはおばあさんの友達です。さあ、声をかけてください」と、いつのまにか物語の中に引きこまれ、15歳になった桃太郎が旅を決意する場面では、隣の人とペアになり、年老いたおばあさんを説得する場面を演じるよう指示を受けます。また、知恵を得るために会いに行った僧侶に「10年の覚悟があれば修行に入れ」と選択を迫られる場面では、修行を選択するグループとしないことを選択するグループとに分かれ、なぜそう思うかを討議しました。オーハシ氏のエネルギッシュな進行と、作り上げられていく「まるでありそうな世界」に引き込まれ、いつのまにか桃太郎の悩みを自分のことのように考えており、あっという間に時間が過ぎていきました。

アプライドドラマの筋書きはハッピーエンドではないことが多く、それはつまり、選択に伴う責任も含めて考えていく場であること、またうまく演じるということや何を選ぶから正しいということではなく、あなたはそのまま素晴らしいということなのだとおっしゃったオーハシ氏の言葉が、子どもに関わる際の大切な試金石としても深く印象に残る体験授業となりました。

(井口雅子)



◆分科会 [学習に活かすアート表現]

小野 京子

この分科会では、アートやダンスといったクリエイティブな活動を、学習を深めるツールとして用いる、ということについて学びます。アートで算数や理科などを学習するとは一体どんな方法なのか、参加者の皆さんは興味津々でこの分科会に集まってきたようです。



はじめに、講師よりアメリカやカナダのモデルが紹介されました。トレーニングを受けたアーティストらが学校などの教育現場に赴き、算数など芸術と直接結びつかないような主要科目について指導する、これがすでに様々な現場で実践されているとのこと。学校で行われる多くの学習は人間の知能の一部である記憶や操作といった能力に頼りがちであるということですが、音楽や身体による表現など様々な能力を教科の指導に生かせば、個々の子どもたちの理解も深まるし、タイプの違う子どもたちに学習への興味を促すことになりそうだと感じました。その後、実際に算数の「円」の授業を体やダンスで学ぶということを経験しました。5, 6人ずつのグループに分かれた参加者達は、「中心、直径、半径、円周、弦など円に関わる概念を踊りで表現してください」そんな奇想天外な課題を与えられました。短い時間でグループ毎に真剣に協議し合い、体の動きで確認し合いながら徐々に動きが完成していきました。完成したダンスを発表し合う際は、メンバーが同一の振り付けで表現するグループ、サークルの中で一人ずつ順番に動きで表現するグループなど、各グループの個性が見られ、観客もダンスを楽しみながら円の概念を客観的な視点で学ぶことができました。発表を終えたところで、画用紙と画材で今日の学びを色や形で表す、ということを行いました。

この分科会を通し、自分の体で動き、人の動きを観察し、体験を絵で表現し、完成した絵を言語的に他者と共有し合うことができました。異なる五感を用いて深めた学習は、しっかりと頭と体に刻まれたことを実感しました。機会があれば、ぜひ様々な単元について学ぶ体験をしたいと思いました。

(倉石聡子)



参加者の声

このワークで一番驚いたことは、参加者全員を違和感を感じることなく自然とワークにファシリテーターが導入していたことです。参加者がファシリテーターのテンポに頑張っついていく必要がなく、むしろファシリテーターが参加者たちのテンポに合わせてワークを進めてくださったのでとても居心地が良かったです。教育の現場で使う手法として紹介されていましたが、クラス全員の子どもたちが取り残されることなく学ぶ機会が持てて効果的なんだなというのを実感できました。今回は数学の授業に絡めてのワークでしたが、遊びながら知らぬ間に身体で内容を身に付けることができ、楽しかったです。ありがとうございました。」

ねらい：ダンス／ムーヴメントセラピー（DMT）の視点から、子供との共感的な関わりを築くための身体動作感覚を探索していくこと。

全体の流れ

- ◇ 自己紹介をしながら動きを加えてのウォームアップ
- ◇ グループ・ダンスのリーディングと、終了時にそれぞれが気持ちの『言葉化』
- ◇ 同調性の探索：ペアにて手を合わせたままゆれる—合わせて離れて(出会いと別れ)
- ◇ ミラーリング：『自分の言葉化』をモチーフに一人が動き、パートナーが鏡のように動きで反映
- ◇ まとめ：ミラーリングについての話；グループでのミラーリングで終結

参加者の様子

16名ほどが参加。DMT初体験者も数多くいたようだが、身体動作を介しての自己表現にすんなり取り組んでいかれた印象。AMワークがそれぞれの心身のウォームアップとなり、また他者の表現を尊重するグループとしての素地づくりにもなっていたか。

グループとして他者の動きを尊重し合う中、それぞれの自由な動きが生まれ、ある種の解放感とリラックス感をもたらしていたようである。続く同調性の探索で出会うことの安心感や別れにともなう不安が率直に共有。さらに、ミラーリングでは『自分の言葉化』が動くためのモチベーション（& 枠組み）としての機能を果たし、短時間で自分の動きの世界に入ってしまった印象。パートナーは比較的スムーズにフォローしていくようになり、各ペアが同調（共感の基礎）を体現するプロセスが展開されていったように見えていた。各ペアでのシェアリングにも真摯に取り組んでいった様子が見られた。

子供の心の成長にミラーリングが果たす役割は感じとられたようで、『動きで相手のことがわかる驚き』の感想が共有された。一部、フォロアーの側の投影同一化が聞きとられることがあり、共感の成立のためのミラーリングは合体や融合とは異なるモノであり、主体—主体の関係性に基づくものであると、再度明確化する必要があった。

とは言え、短時間にもかかわらず、楽しくオープンにワークに集中していくグループとなったことに、ファシリテーターとしては参加者のご協力に感謝するばかりである。

感想

ミラーリングのワークを通して、実際にどんな気持ちの変化が生まれたのか、もう少し明確に強調したかったところである。そして、ミラーリングを通して、私たちは共感しようと努力することしかできるわけではないこともまた、押さえておくべきポイントだったろう。ファシリテーターとして初めに『どこまで』とビジョンを持つべき、と学ぶ。 (神宮京子)



参加者の声:いろいろな人とペアになって動いてみたり、真似をしてみたりした。人によって感じが違って、ぴたっとくる人とこない人がいた。ぴたっときたときに、気持ちがほっと和らいだ。

参加者の声:最初に自己紹介を動きでやったが、一人ひとりの動きがおもしろくて、それをつなげてやってみると、さらにおもしろくなって、さらに早いスピードでやると夢中になっていた。久しぶりにからだを思いっきり動かした気がして、童心にかえりました。

◆分科会 [多様な単位で支える子どもの育成

～ハワイの音楽療法に学ぶ子ども支援のありかた]

大竹 孔三

この分科会ではまず、スライドを使っての音楽療法の簡単な説明と、ハワイでの音楽療法の実践について紹介があった。実践の紹介では、貧困地区に暮らす青少年や、自閉症の子どもをもつ家族との実際のセッションの様子がビデオで紹介された。ウクレレやドラムといったハワイに根づいた楽器が用いられる様子や、自分たちの文化に触れることによって、体に刻みこまれていた音楽がクライアントから奏でられはじめる様を垣間見ることができ、当地文化への理解の大切さや民族の誇りのもたらす底力を強く感じた。

紹介に続いて行われた体験セッションでは、講師がギターを弾いている間だけ楽器を鳴らしたり、リズムや雰囲気まねるすという簡単なゲームや、グループメンバーと合わせて弾く合奏やソロでの演奏といったことをボランティア5名が体験し、感想を述べた。

ハワイでは、欧米で開発されたセラピーやプログラムが定着しにくいのだという。親戚や助け合うことをいとわない親しい人たちを意味する「オハナ（家族）」という言葉が存在するように、個人より人間関係を大切にする文化なのだそう。また、観光が主要産業のハワイで、実は観光業が停滞しているということや、ハワイ系青少年の自殺率が全米でトップであるといった社会的な事情についても紹介があり、現在のハワイの一端を知ることができた。異文化理解と言葉ではいうが、本当の意味を考えるきっかけをもらったように思う。その土地に必要とされるものを、その人たちにあった形で提供していくことの大切さと可能性を、改めて考えさせられる時間であった。

(井口雅子)

参加者の声

今まで自分が持っていたハワイのイメージが覆されました。自然が豊かで穏やかなハワイが、貧困問題に直面しているということに驚くと同時に、家族(オハナ)や地域単位でのセラピー活動がもたらす暖かでハワイらしいサポートに心がほんわか温かくなりました。

「今まで自分が持っていたハワイのイメージが覆されました。自然が豊かで穏やかなハワイが、貧困問題に直面しているということに驚くと同時に、家族(オハナ)や地域単位でのセラピー活動がもたらす暖かでハワイらしいサポートに心がほんわか温かくなりました。」



◆全体会 「ワールドカフェで今日一日を振り返る」

一日の締めくくりとなる全体会では、ワールドカフェの手法を用いて、小グループで話す機会をもった。ふり続く雪にもかかわらず 50 名ほどの参加者が残り、一日の中で感じたことや発見したことなどを、テーブルを囲んで分かち合った。

会を始めるに当たり各分科会から二人ほど感想を述べてもらったのだが、そこにいること (Being) を受け入れてもらえる体験をしたということや、奏でられるありのままの音楽を大事にしながらかセッションをしていくことを学んだということなど、午前中に取り上げられたテーマが、各分科会でも共通して流れていたことを感じた。



それらを受け、ワールドカフェのテーマを「ありのままがいい」とし、テーブルごとに、この言葉について自由に話し合う時間を 15 分ほどもった。テーブルに置かれた模造紙には、対話の中で出てきた印象的な言葉や、そこから浮かぶイメージなどが自由に描かれ、中には絵だけで模造紙が埋められていくグループもあった。「ホスト」として一人をテーブルに残し、あとの人は「旅人」として自由に他のテーブルに移動して、再び 15 分ほど話す時間をもった。メンバーが変わることで、また前グループで話されたことが伝達される中で、新たな話し合いがなされたようであった。最後に元のテーブルに戻り、旅先での出来事をシェアしあい、総まとめとして、テーブル毎にどのような話し合いであったかを紹介してもらった。多くのグループで、「ありのまま」とはどういう意味なのかについて様々な角度から話されたとのことであった。

プログラム終了後、帰りの時間を気にしながらも多くの参加者がお互いに交流する様子が見られ、この会が支援者のネットワーク構築の機会となったことを感じた。

(井口雅子)



5. アンケート

アンケート回収：39名

<満足度>

- ①満足30名 ②まあ満足5名 ③普通1名 ④やや不満0名 ⑤不満0名
- ⑥未記入3名

<感想>

■基調講演

- ・お役にたつならという気持ちで生活したい。
- ・「不快な感情の扱い方」「自己肯定感」、怒りの裏に「願い」があること、印象に残った。
- ・本当に勉強になった。
- ・とても感動的な講演だった。

■体験授業

- ・本当に勉強になった。
- ・楽しかった。

■分科会

- ・純粹にワークとして楽しむことができた。ただ、理論的な部分やスピリチュアルな部分は入っていきにくかった。
- ・「自分の中にどんなきもちがわいてきたか」という自分の心を重視することが重要だと気づいた。

■全体会

- ・いろいろな言葉を交わせたことも、ほどよい刺激になり楽しかった。

■全体を通して

- ・楽しかった。思い切って参加して本当によかった。
- ・とても有意義、充実した時間であった。エネルギーをもらった。
- ・アドレナリンが出まくった。もっと広範な層に。また、本当に無料でいいのか。
- ・集まっている人々が素敵であった。
- ・どの枠も内容の濃い、心や体に直接働きかけるもので感動した。
- ・どの時間も安心と安全が感じられる中、本当に充実した体験を味わうことができた。
- ・身体も心もほぐれて柔らかくなる感じがした。子どもたちに反映できるように工夫したい。
- ・子どもと関わるワークのためにとっても参考になった。
- ・はじめは恥ずかしさ、自分の枠にしばられていたが、次第にほぐれてゆるく自由になっていく感じがした。
- ・はじめて体験することがたくさんあり、自分で感じて参加できた。勉強になった。
- ・自分がどんなことに惹かれているのかということに、多くの人との交流とを押しつけて気づいた。同じことに関心を持っていても、人それぞれが表現してみること、やりながら考えること、他の人を見ることなどにより、また新しい色が生まれることを体験として学んだ。
- ・人の持つクリエイティブな力、コラボレーションの素晴らしさをしみじみ感じられた。

- ・カウンセリング手法は勉強してきたが、それで明けでは足りない何かがあると感じていた。誰も入っていけない心の中に、芸術は入っていてくれるものがあると改めて感じた。
- ・相手の心に寄り添うためには、「ありのままの自分に気づいてもらい、それを無条件に肯定していると伝えること」だと感じた。
- ・はじめての人たちとの交流だったが、人と人が触れ合う時に生まれる気持ちを大切にしたいと感じる分科会、表現や気持ちの言語化の難しさと自分を見つけていくドラマ、Doingではなく Being、いることの尊さを感じた赤鼻先生の話し、どれも素敵だった。
- ・いずれも地下水脈でテーマが繋がっている気がした。素晴らしかった。

◆今後への期待

- ・具体的かつ連続的に講習、習得する機会
- ・紹介的ワークに加え、深めるものがあるとぜひうけてみたい。
- ・取り組みやすい「アート表現」のいろいろを学びたい。

6. チラシ

公開シンポジウム
子ども支援に活かすクリエイティブ・アーツ
～表現あそびがたがやす子どもの心～

子どもは、表現への欲求とそれから学習力を持っています。評価にとらわれず自由に表現し、表現したことをありのままに受け入れられる体験は、子ども時代の心の成長には欠かさないものです。この会では、子ども支援の新しい呼びとなる参加者と共に、自由な表現を保護し、育守る経験がなぜ大切なのか、そのために大人がどのような存在であるべきかを考えます。日々の子どもとの関わりにおいて、ここで得たことを活かすと共に、子ども支援に関わる人とのネットワークづくりを後押しする機会にしたいとも考えられています。

2013年1月14日(月・祝) 10:00～16:30

◆対象：学生ばかりではない全世代
 ◆対象者：教育・医療・福祉・心療などの分野で子どもに関わる方、表現活動を行っている方、現場で子どもに関わる活動を行っている方、行政関係者、保護者、学生など
 ◆参加費：無料 ◆定員：80名
 ◆申込方法：①参加申込書 ②参加人数 ③依頼などあれば ④参加趣意を記載の上、郵送用紙まで下記メールにてお申し込みください。

info@apeconcept.jp

◆主催：アペコンセプト ◆共催：N-CAT ◆協賛：奈良県教育委員会
 ◆お問い合わせ：シンポジウム事務局 (info@apeconcept.jp)

Program プログラム

10:00～11:30 4階研修室
基調講演 講師：副島 賢和
 『このころの声か言葉になる～院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと～』

11:40～12:40 4階研修室
体験授業
 『さあ、みんなでアプライドドラマ！お昼の世界に飛び込もう！』

13:30～15:00 4階研修室
分科会①
 『学習を促進するアート表現』

13:30～15:00 3Fプレイルーム
分科会②
 『からだの触れ合いがこころを育む』

15:15～16:30 4階研修室
全体会
 『ワールドカフェで今日一冊を振り返ろう』

13:30～15:00 2Fユニバーシティスペース
分科会③
 『多様な単位で変える子どもの習得～VWの習得事例から学ぶことと発達の振り返り～』